

(1) - 4) アマモ場再生の取組による海資源の活性化と利活用 - アマモ -

東京湾で始まった市民によるアマモ再生の取組は、行政や研究機関などとの連携を深めながら、大きな成果をあげようとしている。現在、東京湾の活動を契機にアマモ場保全の動きが全国各地に波及しつつあり、多くの人々の参加によって海の自然再生と資源活用が促進される取組として注目されている。



写真：市民参加によるアマモ場造成活動

(NPO法人海辺つくり研究会ホームページより)

①野生生物への着目の動機・背景

かつて東京湾の干潟や浅場には至るところにアマモ場が形成され、魚介類の繁殖生育の場となっていた。しかし戦後、沿岸の埋め立てや港湾開発、水質汚濁によって急速に減少した。

その数少ないアマモ場のひとつ横浜市金沢八景の沿岸部の野島では、ダイビングを愛する市民団体が海の生物観察を行っていた。しかしアマモ場が徐々に少なくなり、観察できる生きものの種類の減少が目立つようになった。2003年には赤潮で多くの魚介類がへい死してしまい、横浜で唯一残されたアマモ場の絶滅が実感されるようになった。

そこでこの市民団体が中心となり、神奈川県水産技術センターの技術的な支援も受けてアマモ場再生の取組「アマモ・リバイバル！プロジェクト」がスタートした。

②野生生物の状況

アマモは、北半球の温帯から亜寒帯にかけての水深1～数mの沿岸砂泥地に自生する海藻の一種で、雌雄同株で多年生の顕花植物。日本各地の沿岸に分布しており、リュウグウノオトヒメノモトユイノキリハズシとも呼ばれ、生物としては日本で一番長い名称を持っている。

孢子で増える藻類ではなく、海中に生える種子植物であり、節のある長い地下茎とヒゲ状の根、イネに似た細長い葉を持っている。葉は緑色で、先端はわずかに尖り、5～7本の葉脈が先端から根元まで平行に走る。葉は長さ20～100cm、幅3～5mm。雌しべ・雄しべのみの小さな白い花を咲かせ、結実して米粒大の黒い種子を作る。種子は発芽に際して一定時間淡水にさらされる必要があり、種子以外に地下茎の分枝・伸長によっても増える。

まとまって生えている場所である「アマモ場」では、潮流が和らげられ、外敵からの隠れ場となる。そのため多くの生きものたちのすみ家、えさ場、かくれ場、産卵場となっており、「海のゆりかご」とも呼ばれる。また、アマモとその葉についた小さな藻が光合成により酸素を補給し、窒素やリンを吸収することで水質や底質を浄化する役割も持っていると言われる。

アマモ場は、高度経済成長期以降、国内各地の沿岸の埋め立てや港湾開発、水質汚濁によって急速に減少した。しかし近年の保全活動の結果、取組現場を中心にアマモ場が広範囲に再生するなど、保全活動の成果が顕著にみられるようになった。アマモ場の再生に伴い、マコガレイ、イシガレイ、アイナメ、

シロギス、メバル、スズキなど様々な魚類の稚魚が生息し、アオリイカの産卵も確認されるなど生物多様性が向上しつつある。

③保全活動の状況

アマモ場の再生には専門的な知識や再生のための技術が必要であり、また広い海での活動であるために多くの人々の協力が必要とされる。このため大学、研究者、企業、漁業者、行政、地域の人々へ呼びかけが行われ「金沢八景 - 東京湾アマモ場再生会議」が結成された。技術的基盤を確保しながら継続的で広がりのある活動が展開している。

a. アマモ移植活動

アマモを移植し増やしていく活動として、アマモの花枝採取、種子の選別、播種作業、苗床づくり、苗の移植会を実施。

b. 教育・啓発活動

身近な生きものや環境の大切さを子どもたちに伝え、継承していく活動として、環境教育活動、漁協報告会を定期的に実施。

c. 交流活動

より大きな視点で環境を考え、地域、国内、海外の人々と交流し、広げる活動として、海の森つくりフォーラムの開催や、オーストラリア研修などを実施。

作成されたハンドブックやパンフレットでの広報のほか、活動メンバーが各地に赴いて指導・助言等を行うなどして全国に活動が波及している。

④利活用の方法

アマモ場はかつて漁業目的以外でも盛んに利用されていたことが知られている。神奈川県三浦半島では、入会権を設定して海藻と海草を堆肥として利用していたことが記録されている。愛知県三河湾では、雨ざらしにして塩分を除去してから堆肥として利用するとともに、焼いてその灰を肥料として山の地域に売ったという記録もある。静岡県の浜名湖では、戦後の1950年代までアマモを刈り取る操業が行われており、浜名湖全域において集落ごとの採草権が設定されていた。島根県と鳥取県にまたがって位置する中海においても、1950年代までアマモを大量に採集して沿岸の農地に施肥していた。肥料藻は痩せた砂浜を豊かな農地に変え特産品の綿花栽培を可能にしたとされる。しかし化学肥料が使用されるようになった1960年代からは、手間のかかるアマモ堆肥は使われなくなっていった。

近年のアマモ再生活動を契機として、浜名湖などではアマモ堆肥に着目した営農活動を取り扱ったワークショップが行われている。また、神奈川県横浜市金沢八景にある瀬戸神社では、東京湾で自生するアマモを使った神事「無垢塩祓（むこしおぼらい）」が80年ぶりに復活した。無垢塩祓は罪やけがれをはらうとされるアマモを神社近くの海から刈り取りみこしに取り付けるという神事。環境悪化によるアマモの減少等で行われなくなっていたが、再生されたアマモを移植させる形でアマモが準備され神事が行われた。神事の復活にはアマモ再生活動に取り組む市民団体などが全面的に協力しており、今後のアマモ再生への願いが込められている。

アマモ再生の進展に活動に伴い、アマモは海の保全再生の象徴として普及啓発活動にも取り上げられるようになってきている。横浜海の公園では天皇皇后両陛下のお手渡しによるアマモ植栽が実施される

など、アマモ場再生の取組は環境教育で広く紹介され、作成されたパンフレットは全国的に普及し、学習や交流活動で生かされている。また、アマモがシンボルとなり、ワカメやノリをはじめとした各種魚介類など海産物の販売PRにも結びつこうとしている。